

東大病院だより

表題：海野濤山書

No. 47



桐原（花岡）眞節 初代院長の肖像

CONTENTS

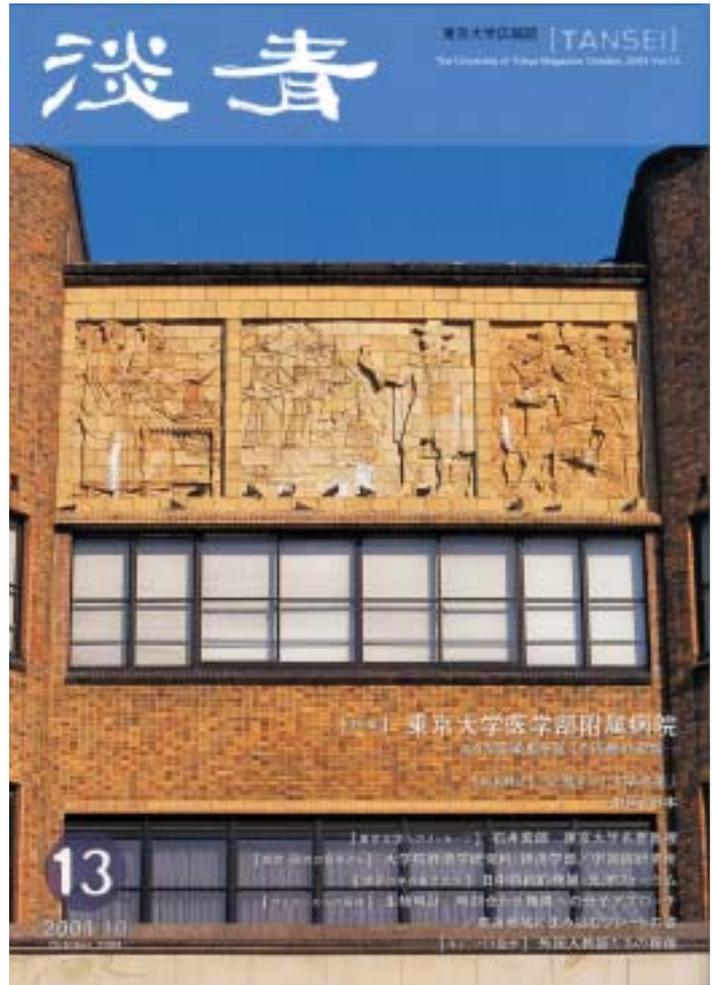
- ◆ 東京大学広報誌「淡青」への東大病院特集記事の掲載について 2
- ◆ 新潟県中越地震被災者への医療支援について 3
- ◆ 東大病院火災の予防と通報システム—本郷消防署にきく— 4
- ◆ “土門 拳の撮影、2人の院長の肖像写真が発見される” (加我) 6
- ◆ 東大病院創立150周年に向けて
—明治維新激動期に、オランダ医学からドイツ医学導入へと
流れを変えた相良知安先生の活躍について— (加我) 8
- ◆ <東大病院の“遺産”シリーズ 6> —耳鼻咽喉科— (加我) 9
- ◆ 新任教授ご挨拶 (鈴木) 10
- ◆ 出来事 11
- ◆ 東大病院の四季 12

東京大学広報誌「淡青」への東大病院特集記事の掲載について

東京大学広報誌「淡青」第13号、(平成16年10月31日発行)に特集『東京大学医学部附属病院—大きな変革期を迎えた医療の現場—』が掲載されました。

(掲載内容)

1. 東大病院は一つの街だ！
2. 東大病院と建物の歴史
3. 臨床のフロンティア
4. 東大病院というコミュニティで働く人々
5. これからの医療を目指して—臨床応用が近い代表的な研究の紹介—
6. 東大病院における医療安全対策
7. 東大病院の運営体制の改革—病院システムという新しい考え方の導入—
8. これからの東大病院に望むもの
永井良三病院長 VS 日経メディカル副編集長北澤京子氏対談
「今後の東大病院の進む道」



東京大学広報誌「淡青」13号の表紙

淡青は、東京大学ホームページからご覧になれます。<http://www.u-tokyo.ac.jp>

表紙写真説明

東大病院初代病院長・桐原眞節先生

天保10年(1839)～明治17年(1884年) 略歴

天保10年信濃岡山辺村に花岡吉次郎の子として生まれた。江戸に出て、桐原鳳郷の門に入り医学を学んだ。さらに種痘所設立メンバーの林洞海、オランダ医学の坪井信道、適塾出身の大村益次郎らについて蘭学と西洋医学を学んだ。万延元年(1860)長崎に国内留学し、我が国で初めて正統的な医学教育を行ったオランダ人医師ポンペと、その高弟で後に東大医学部の前身・西洋医学所の頭取となる松本良順のもとで最新の西洋医学の知識と技術を学んだ。慶應元年(1865)、江戸に帰り、江戸幕府の西洋医学所教授に就任した。明治維新後は、東大医学部が誕生する前の大学東校教授に就任した。明治10年、東京大学が設立されるとともに東京大学教授となり、かつ完成したばかりの附属病院第1医院の院長となった。明治13年に外国人教師のベルツ教授らとともに東京神田弘医会を設立し我が国医学知識の普及に貢献した。明治15年、花岡姓に復した。明治15年から17年まで東大病院の院長として活躍した。明治18年、47歳で死去。お墓は谷中の天王寺にある。

新潟県中越地震被災者への医療支援について

医学部附属病院では、新潟県医薬国保課の要請を受け、10月30日（土）から11月11日（木）までの間、新潟県長岡市三島町役場に教職員による医療支援チームを派遣した。チームは医師1、看護師1、薬剤師1、事務1の計4人を3泊4日派遣の1チームとした7チームを編成し、常時2チームを現地に派遣する体制を整えた。

三島町は、長岡市の西側に隣接した人口約7,500人の町で、相次ぐ余震による新たな災害の発生や、7月13日に新潟地方を襲った集中豪雨による大規模な土砂災害や水害の傷跡がいまだに生々しく残っている所である。町役場や小学校に避難している住民及び自宅療養中の住民の方々に対し仮設診療所を設営し、巡回往診等の医療支援活動を行ったものである。

支援活動

支援期間 10月30日（土）から11月11日（木）
 受診患者数 355人（臨時診療所202人、巡回・訪問診療153人）

延べ派遣人数 52人

(1) 中央会館診療所の開設

診療時間 8：30～13：00
 15：00～18：00

(2) 町内巡回診療の実施

町内の全17集落を対象に、1日あたり2～3カ所の巡回診療を実施
 診療時間 9：00～11：30
 13：30～15：00

(3) 夜間診療の実施

避難住民が多い脇野町小学校において診療を実施
 診療時間 19：00～21：00



問診を行う矢作救急部長



巡回診療を行う東大病院チーム



診療を行う医学教育国際協力センター大滝助教授



地震により陥没した道路

東大病院火災の予防と通報システム

— 本郷消防署にきく —

“八百屋お七”のポスターで知られる本郷消防署は、文京区の東半分を管轄し、その受け持ち区域は区の面積の42%を占め、東京大学が管内の約12%を占める。東京大学をはじめとして大小38の学校を数える。

過去1年の東京大学への消防車の出動は2件、病院へ1回、医学部以外の研究室での爆発1件、とのことである。毎年平均2回の火災による消防車の出動がある。平成15年中の管内の火災は36件で、その原因は放火、たばこ、電気が多い。東京消防庁全体では、

圧倒的に多いのが放火・放火の疑いで、次がたばこ、ガスである。東京大学は構内が広く、暗いために放火事件が起きやすいという。

本郷消防署の消防車の数は、NBC（放射線・バイオ・毒劇危険物）特殊災害対策車、ポンプ車、はしご車、救急車、救助先行車（指揮隊車）が各1台、その他を所有し、活動している。一方、救急車の出動件数は毎年平均約6000件、1日当たり18件と多い。

去る6月18日、東大病院の入院B棟地下・深部治療棟1階の放射線治療室内の高圧電源ユニットから煙が発生した。放射線治療施設の火災と消防庁に通報されたため、NBC特殊災害対策車を含め、計54台の消防車がバス通りに終結した。治療終了後のテスト照射中の事故であったため負傷者はいなかった。

◆東大病院からの火災の通報と消防車の出動のしくみ

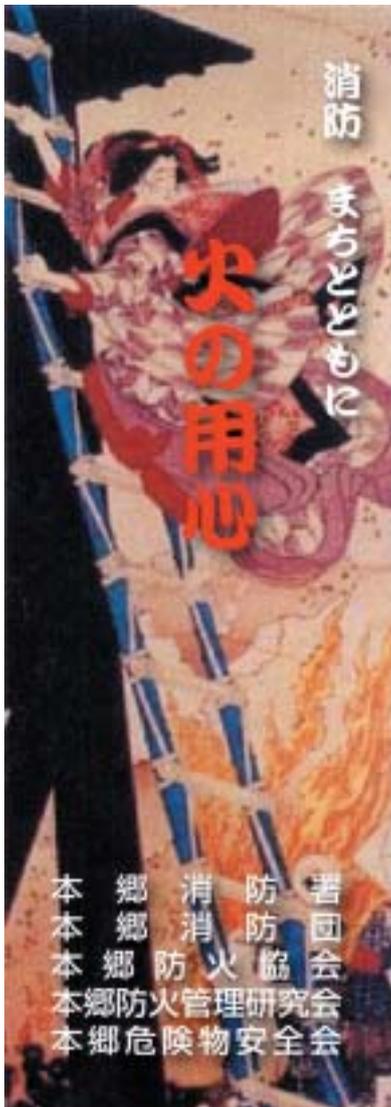
「有人直接通報」と呼ばれる方式がとられる。病院内に設置してある自動火災通報設備が火事を感じて作動した時に、火災通報装置から自動的に所在、名称が119番される。あるいは火災の発見者が119番する場合も含まれる。この通報がセンターの東京消防庁に伝えられる。この通報とともに火災の起きた建物を管轄する消防署に指令が出され、消防車が出動する。

火災は何よりも予防である。

9月7日～9日に実施された本郷消防署の査察による注意事項は次のようなものである。

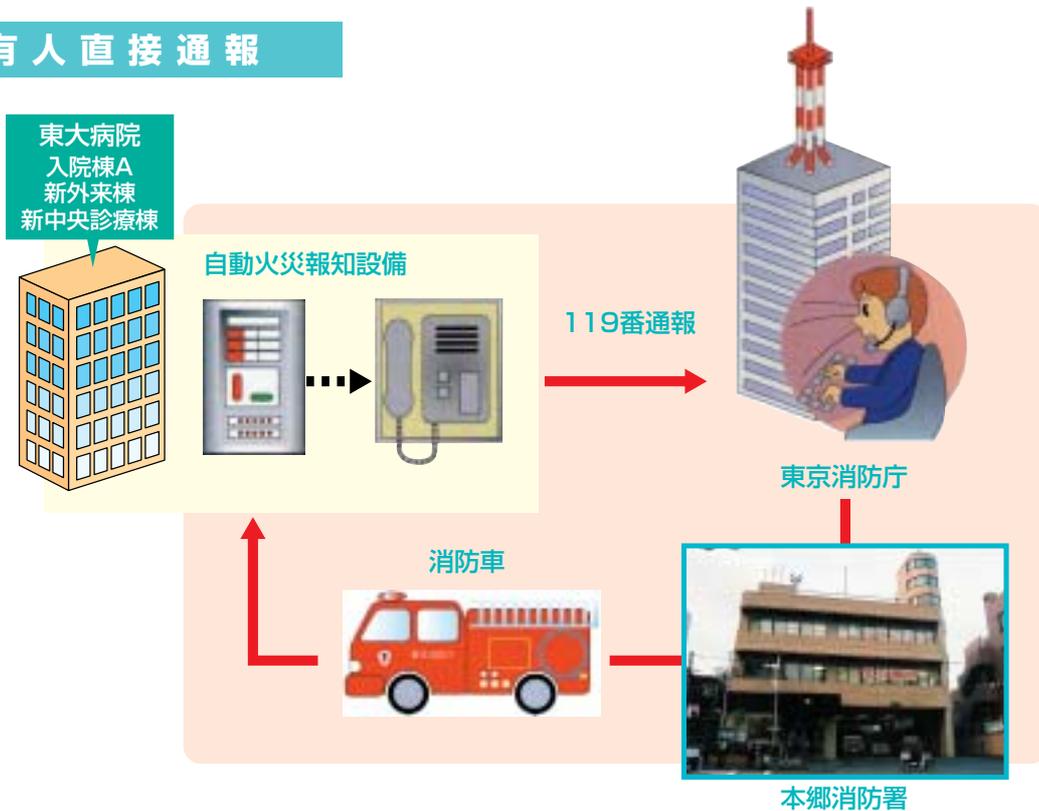
1. 薬品ピンの落下の予防、棚の転倒防止を行い、薬品の爆発を防ぐ。

丁度、10月27日付で東大本部の安全衛生管理室より「試薬の誤認による爆発事故の再発防止について」という知らせがあった。最近本学内で実験中の試薬の誤認による爆発事故があったための注



八百屋お七（錦絵）

有人直接通報



出火原因別 (平成15年中)

順位	本郷消防署		順位	東京消防庁	
	原因	件数		原因	件数
1	放火・放火の疑い	8	1	放火・放火の疑い	2,342
1	たばこ	8	2	たばこ	902
3	電気	7	3	ガステーブル等	611

意である。この爆発事故でも本郷消防署の消防車が出動した。

2. 不燃カーテンの使用と表示。燃えやすいカーテンに注意。
3. タコ足配線を絶対にしない。電源コードからのショートによる火事を予防する。
4. 廊下、研究室内の整理・整頓をし、段ボールやX線フィルムなどの燃えやすい物を置かない。万が一避難する通路を塞ぐように廊下の左右にロッカーや研究機器を置かない。

この他に常識的なことであるがタバコの吸殻、石油ストーブやガスストーブの転倒やガス管なども注意がいる。東大病院の研究室等は“火災の予防”という視点でも整理・整頓が必要である。病院に働くわれわれは、病気の予防や習慣病については患者さんに熱心に指導するが、火災の予防についての関心が低いという社会的な習慣病に陥りかねない。年に1回のペースで本郷消防署による東大病院の火災訓練の指導と各建物の立入り検査は、火災の予防をremindさせるために重要である。

“土門 拳の撮影、2人の病院長の肖像写真が発見される”

東大病院の倉庫の中に歴代の病院長の肖像写真が無造作に積み上げられていた。その中に表紙の初代院長桐原眞節先生の初めて見る写真（表紙）の他に、土門 拳の力強い署名のある三木威勇治先生と秋元波留夫先生の写真が含まれていた。土門 拳は戦前戦後活躍した我が国を代表する写真家である。「一日本人としての自分自身が日本を発見するため、日本を知るため、そして発見したものをみんなに報告するため」に、写真という表現手段に全身全霊で取り組んでいた。1935年（昭和10年）に名取洋之助が主宰する日本工房に入社し報道写真の基礎を身につけた。1939年に退職後、室生寺や文楽のような日本伝統文化の撮影に取り組んだ。

戦後は、一転して「リアリズム写真」を提唱し、写真集「ヒロシマ」（1958）、「筑豊の子どもたち」（1960）のような問題作を発表し

た。1959、1968年と脳出血で倒れ、リハビリを受けた。車椅子に乗りながらシャッターを切り続け、「古寺巡礼」（1963-1975）、「東大寺」（1973）を出版。「写真の鬼」と称された撮影への執念、気迫のこもった対象への凝視によって生み出された作品群は、日本人の写真家としては燦然と光を放っている（日本の写真家16、土門 拳、岩波書店 1998）

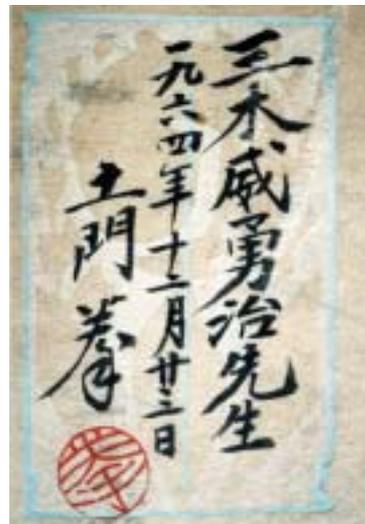
土門 拳による三木威勇治院長の写真は1964年12月23日、秋元波留夫院長の写真は1966年春の撮影である。1度目と2度目の脳出血の間の時期で、古寺巡礼全5巻の撮影に没頭していた頃である。東大病院から土門 拳にどのような経緯で撮影を依頼されたのか謎である。

整形外科・三木威勇治教授の紹介

50肩という言葉は今では誰でも知っているこれは。三木教授の作られた言葉である。患者さんに対して「どこがお痛みですか？」といつも丁寧な言葉づかいであったという。骨のX線写真を見て、「骨は材木ではないのですよ。1例、1例、広い視野で症例を見てください。患



三木威勇治先生の肖像写真
（土門 拳撮影：1964年12月23日）



土門 拳の書

者さんを実験材料視してはいけない。新しい試みは慎重にやってください」などと教室員を指導した。

以下に略歴を紹介する。

三木威勇治教授略歴

明治37年（1904）福岡県芦屋に生まれた。大正14年第一高等学校卒業後、昭和4年東京大学医学科を卒業（在学中はボート部に在籍）し、

整形外科に入局。昭和8年外来医長、昭和17年東北大助教授、昭和19年東北大教授に昇任し、整形外科学教室創設、昭和24年東京大学教授、昭和37年（1962）東大病院長、昭和40年退官、昭和41年日本医師会副会長。仙台の学会講演の帰途、車中に倒れ亡くなる。

土門 拳の肖像写真は、三木威勇治先生の心優しい人格がよくあらわれている。

秋元波留夫先生略歴

秋元波留夫先生は東京大医学部精神医学の教授として活躍され、本年98歳という高齢ながら、90歳を過ぎてからそれまでにも増して現在に至るまで次々と専門書を刊行するなど、精神医学の領域に影響を与えている。まさに東大医学部の生んだ“巨人”である。略歴を以下に紹介する。

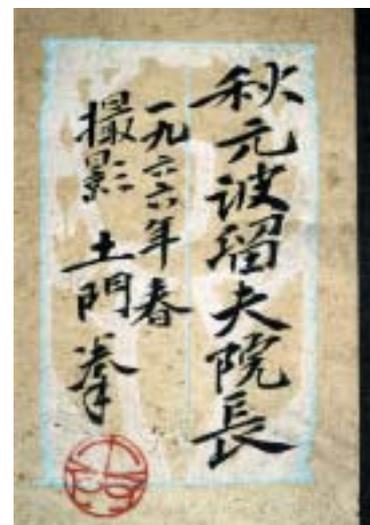
1906年長野市に生まれ、1925年旧制松本高等学校を卒業し東京帝国大学に入学し、

1929年に卒業し、直ちに北海道帝国大精神医学教室助手。1937年東京帝国大学講師。1941年金沢医科大学教授。1958年東京大学精神医学教授。1964年東大病院長。1966年退官。国立武蔵療養所長（現・国立精神神経センター所長）。1979年都立松沢病院副院長。1987年退職。著書は、精神医学、高次神経機能、てんかん、精神科リハビリテーションなどの領域に多数ある。近著として2002年に「ジャクソン神経系の進化と解体」があるが、さらに数点出版される予定である。

土門 拳の秋元波留夫先生の肖像写真は先生の人間的な深さがよく表現されている良い写真である。来年100歳のお祝いの会が予定されているとのことである。



秋元波留夫先生の肖像写真
（土門 拳 撮影：1966年春）



土門 拳の書

東大病院創立150周年に向けて

—明治維新激動期に、オランダ医学からドイツ医学の導入へと流れを変えた相良知安先生の活躍について—



相良知安の肖像画

相良知安（さがらともやす） 天保7年（1836）～明治39年（1906）

東大病院の東側、池之端門の近くの高台、看護寮のある木立の中に、相良知安の顕彰碑が立っている。明治政府の中で新しい日本ではドイツ医学を手本として学ぶ必要があると周囲の抵抗に負けずに主張した人物である。その頃は西洋医学というのはオランダ医学のことであると思った人が多く、一方、西郷隆盛が支援したイギリス人医師ウィリスやフランスで医学を学んだ高松凌雲などもいた時代である。相良知安はオランダ医学で使われていたテキストの多くはドイツ語からの翻訳であることを知っていた。彼のドイツ医学が世界で最も進んでいるという主張に遂に周囲が折れ、ドイツから医学教師を招くことになった。32歳の時であった。最初の教師がミュラーとホフマンであった。この時代、

医学以外の領域ではイギリスやアメリカなどからそれぞれ専門家が外国人お雇い教師として来ている。札幌農学校（北大の前身）に招かれた“Boys be ambitious”のクラーク博士はアメリカ人であった。

相良知安の略歴は次のとおりである。天保7年佐賀藩医の相良柳庵の子として生まれた。佐賀で蘭学を学んだ後、佐倉の順天堂の佐藤尚中のもとで外科学を学んだ。さらに長崎に国内留学し精得館でオランダ人医師ポールドインに学んだ。その後佐賀に戻り、藩主鍋島閑叟の侍医となり、明治維新後、閑叟に随い上京した。明治2年医学校取調所御用掛を命じられた。政府に岩佐純とともにドイツ医学の採用を提言した結果受け入れられ、ドイツ人医師ミュラーとホフマンの来日が実現した。明治3年冤罪により投獄されたが、明治5年無罪となり、同時に第一大学区医学校長（東大医学部の前身）に就任、翌年初代の文部省医務局長を兼任した。その後辞任し、しばらく文部省に籍を置いたが、野に下った。後半生は不遇であり、生活費にも困るような状況であった。明治39年（1906）に亡くなった。彼のドイツ医学の導入の提言により、我が国の医学は大きく進歩し、その選択の影響は現在まで続いている。現在でも医学生が第2外国語としてドイツ語を選ぶことはそのあらわれである。

看護職員宿舍4号棟（旧看護学校さつき療）の近くの顕彰碑は明治10年に建立された、碑文は建立者入沢達吉教授である。

文献：武内博編著「日本洋学人名辞典」 相書房 1994



相良知安の顕彰碑（上）と
碑文（右）

相良知安先生記念碑 枢密顧問官正三位勲一等功三級子爵石黒忠愍願
明治維新初政府将ニ和蘭医学ニ代フルニ英吉利医学ヲ以テシ医学教育ノ面
目ヲ一新セントス時ニ世ノ類ニ獨逸医学ノ学内ニ傑出セケラ説クモアリ又
来朝中ノ一外人モ亦頗ル之ヲ贊スルアリ茲ニ於テ廟義斷然獨逸医学ヲ採用
スルコトニ決シ普魯西公使ニ囑シ医学教師を聘セントス適普仏戦争起ルニ
会シ其事行ハレス明治四年ニ及ヒテ始メテドクトルミユルレル来朝スル
リ遂ニ其提案ニ拠リ本邦医学教育方針ノ確立ヲ見ルニ至レカ其制度ハ一
ニ獨逸ニ則リタルモノナリ此間ニアリテ斡旋尽力幾多ノ反対論ヲ説服シテ
政府ノ規画ヲ達成セシメタルモノヲ相良知安先生ト為ス先生ハ実ニ獨逸医学ヲ
輸入シタル恩人ナリ先生名ハ知安弘庵ト号ス佐賀藩医ナリ明治二年一月召
サレテ医学校御用掛ヲ命セラレ医政ニ執掌ス尋テ大学少丞ニ任セラレ五年
十月第一大学区医学校校長ニ遷リ翌年文部省築造局長ニ任シ医務局長ヲ兼
又先生ノ医務局長タルヤ建議シテ上野ノ地ニ医学校及大学病院ヲ新築
シ長橋ヲ不忍池ニ架シ以テ交通ニ便ナラシメントセリ而カモ一部ノ反対ニ
遇ウテ果ス能ハス先生乃チ政府ニ逼リ其代償トシテ本郷ノ旧加賀藩邸ヲ得
テ以テ医学建設地ニ充テソコトヲ請ヒ之ヲ許サル九年ニ至リ医学校及病院
ノ新營始メテ成ル是レ今日ノ帝国大学所在ノ地タリ先生ノ文部ニ宮スル部
下ノ累スル所トナリテ奇禍ヲ蒙レルコトアリ冤雪カレテ出仕スルコト而度
及ヘルモ皆久シカラシテ之ヲ罷メ遂ニ船晦シテ復タ出テ三十二年政府
其前功ヲ録シ勲五等ニ叙シ双光旭日章ヲ賜フ三十九年六月十四日病ニテ歿
ス享年七十一特旨ヲ以テ正五位ニ叙セラル先生人ト為リ剛毅果敢甚才幹
アリ而カモ狷介孤峭極メテ自信ニ篤シ是ヲ以テ世ト相客レス軼軻其身ヲ終
フ深ク惜ムヘキナリ先生ノ歿ヲ距ル茲ニ二十有余年後進ノ徒先生ノ本邦医
学制度創設ノ際ニ於ケル功績ノ湮滅ニ悼セソコトヲ慮リ相謀リ賈ラ醜シ石
ヲ帝国大学ノ庭中ニ樹ラ表彰セントシ文ヲ予ニ徴ス予不文敢テ当ララスト雖
モ爰ニ先生ノ事歴ヲ略叙シテ以テ後昆ニ諒クト爾カ云フ
昭和十年二月
東京帝国大学名誉教授正三位勲一等
医学博士 入沢達吉撰
野村保泉刻

＜東大病院の“遺産” シリーズ 6＞

—耳鼻咽喉科—

耳鼻咽喉科学教室には開講以来100年の歴史的な医療道具や検査機器が常設展示されている。医局の約20m²の研究室が展示室である。

1. 聴 覚

音叉が何種類も保管されている。Bezold-Edelman 連続音叉列音叉 (図1)、Hartman の音叉セットなど、オージオメータが開発されるまで、この音叉の音で聴力検査をしていた。パイオリンの原理を使った Struyken monocord (図2) や Galton pipe (図3) などがあり、当時の工夫がおもしろい。音叉というと現在の人は片手で持つ小型のものを想像するであろうが、Bezold-Edelman の連続音叉は大きくて重く両手が必要である。昔の音叉による聴力検査の苦勞がしのばれる。

オージオメータは、アメリカの Western Electric 社製の1A型と2A型が戦前輸入された (図4)。国内で唯一のものである。

第5代切替一郎教授の時代は、両耳聴の一つである方向感の研究が盛んで、正式名の ITD 調整方向感検査装置が制作された。音源と位置を変えて時間差を作るためのマイクが2台入っているもので、その見かけからお墓と呼ばれた。現在2台残っている (図5)。

2. めまい・平衡

フレンツェル眼鏡が登場する以前に使われたパーテルス眼鏡



図1: Bezold 連続音叉



図2: Struyken monocord



図3: Galton pipe



図4: 戦前の米国製オージオメータ



図5: ITD 調整方向感検査装置



図6: パーテルス眼鏡振眼鏡



図7



図8: 手術見学用顕微鏡

眼鏡がある。レンズが特別厚く、サイズが小さいのが特長である (図6)。照明はついていないが、自発眼振なら薄明かりの部屋でもよく観察できる。

3. 鼻副鼻腔

各種のメス、鋭匙、剥離子、ゾンデなど増田式、田所式、黒須式などたくさんあり、一つ一つビニールの袋の中に入れ保管されている。この領域の手術道具は、手術自体が開業医でたくさん行われたこともあり、さまざまな工夫のあとがある。副鼻腔のレントゲンや解剖の立体写真の乾板とviewer がある。乾板を入れて見るものである。すべて白黒であるが、今でも立体的によく見えておもしろい (図7)。

口腔内手術を6人の学生が同時に観察できるように、6つの接眼鏡がまるで八岐大蛇のようについている。患者を口をあけて下顎を台の上ののせ、術者の手技を多数の人間が鏡を反射して接眼鏡で観察する。戦前の Zeiss 製である (図8)。

4. 口腔・咽頭

口腔内手術を6人の学生が同時に観察できるように、6つの接眼鏡がまるで八岐大蛇のようについている。患者を口をあけて下顎を台の上ののせ、術者の手技を多数の人間が鏡を反射して接眼鏡で観察する。戦前の Zeiss 製である (図8)。

5. 喉 頭

切替一郎先生の製作したわが国初の喉頭ストロボコープ。(図9) 高速の声帯の動きをスローモーションで観察するもので、当時は16mm映画にとった。ビデオがなかったからである。

6. 教育用ろう製模型

イタリアより皮膚科の初代の土肥廣蔵教授が持ち込んだもので日本人の職人を養成し作成されたものと言われている。医学部標本室には皮膚疾患のムラージュ (ろう模型) があるが、ここには耳鼻咽喉科疾患が保存されている。

昔の医療機器は教室や病室の移転の際に役立たないものとして捨てられやすい。しかし、歴史的には貴重なものが少なくなく、保存すべきものは保存し、後世に伝えたい。英国では医療機器の骨董屋があるだけでなく、あのザザピースがオークションまで開催している。 (加我君孝)

新任教授ご挨拶



薬剤部
鈴木 洋史 教授

この度、6月16日より薬剤部を担当させていただいております。薬剤部の最も重要な使命は、薬物治療に関わるリスクマネジメントにあります。この観点からいくつかの業務内容をご紹介します。まず、入院患者様への注射液の調剤ですが、病棟からオーダーされた処方箋を鑑査し、その後患者様ごとに投与する注射剤を取り揃え、輸液バックなどに患者様氏名・薬剤名などを記入したラベルを貼り、最終的に鑑査をした後、1つのボックスにセットにして病棟への搬送を行っています。このようにして、患者様に必要な注射剤が、誤りなく投与されるようにしております。また、すべての診療科からオーダーされた高カロリー液や抗がん剤についても同様な方法により調製がなされますが、特にクリーンベンチ内で無菌的に輸液バック・注射筒内に混合調製することにより、高品質な注射剤を供給いたしております。また、ICU、CCU、HCUなど、投与薬剤の変更が頻繁に行われる難易度の高い部署には薬剤師が常駐し、医療スタッフに薬に関する情報をリアルタイムで提供しながら、病棟フロアにて注射薬の調製を無菌的に行っています。時間を区切って、無菌病棟や血液内科にても同様な活動を展開しています。そして、真の意味でのチーム医療実現を目指した活動を展開しております。さらに、本年から外来化学療法が開始されましたが、処方内容と抗癌剤治療のプロトコールとの整合性チェックなど、徹底した処方鑑査に基づく注射剤調製を行っています。このほか、免疫抑制剤や抗生物質など、患者様の血液中濃度をモニターしながら、データを解析することにより、適切な次回の投与量を提言する、TDM業務も展開し、治療域の狭い薬物を用いた、安全で有効な治療法の確立に貢献いたしております。一方、患者様とは、服薬指導業務を通じて、お薬に

関するご質問にも直接答えさせていただく機会を設けてございます。

このように、薬剤部を構成する薬剤師は薬の専門家であり、薬に関する情報を医療スタッフや患者様にいつでも提供できる生き字引的存在でなければなりません。そのために、部員の研修を進めると共に、薬剤師の生涯教育にも積極的に取り組んでおります。そして、基本調剤はもとより、例えば抗がん剤領域など、専門性を有する、そしてこれからの高度な薬物治療にも対応できる薬剤師を育てていきたいと考えています。折しも、医療現場で活躍できる薬剤師を輩出することを一つの目標として、平成18年度より薬学教育6年制が導入されようとしています。薬剤師の医療現場における役割が益々重要視されてきたものと捉え、更なる薬剤部業務の展開・充実を図りたいと考えております。そして、特に薬物治療上のリスクマネジメントという観点から、東大病院の目指す患者様本位の医療の実践に貢献したいと考えておりますので、益々のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略 歴

昭和59年 3月	東京大学薬学部薬学科卒業
昭和59年 4月	東京大学大学院薬学系研究科修士課程入学
昭和61年 3月	同上修了
昭和61年 4月	東京大学大学院薬学系研究科博士課程入学
昭和62年 12月	東京大学大学院薬学系研究科博士課程中退
昭和63年 1月	東京大学薬学部教務職員
平成元年 2月	東京大学薬学部助手
平成5年 8月より平成7年 2月まで	アメリカ合衆国（ニューヨーク大学医療センター）に留学
平成8年 4月	東京大学薬学部助教授
平成9年 4月	改組により東京大学大学院薬学系研究科助教授
平成15年 4月	東京大学医学部助教授 附属病院薬剤部 副部長に配置換え
平成16年 6月	東京大学医学部教授 附属病院薬剤部長

出来事

平成16年8月～10月

8月11日(水)

アフガニスタン高等教育大臣一行、東大病院訪問
訪問者：ファエズ アフガニスタン高等教育大臣 ナシフ アフガニスタン高等教育省国際関係局長 ポーバル カプル 大学長 ラオシュ アフガニスタン教育大学長



8月25日(水)

インフォームド・コンセント講習会
時間：17：30～19：00
場所：臨床講堂
講師：医療倫理学分野 赤林 朗教授
前田正一科学技術振興特任教員
タイトル：インフォームドコンセントの実践

8月26日(木)

深部静脈血栓症・肺塞栓症についての講演会
時間：17：30～19：30
場所：入院棟 A15階大会議室
司会：手術部 重松 宏

1. 下肢深部静脈血栓症のリスクファクターと診断・予防 血管外科 宮田 哲郎
2. 肺塞栓症の画像診断 放射線科 赤羽 正章
3. 肺塞栓症の早期診断と初期治療 救急部 山口 大介
4. 肺塞栓症の血管内治療 循環器内科 山崎 正雄
5. 急性期肺塞栓症の手術適応 心臓外科 師田 哲郎
6. 当院における予防マニュアル 手術部 三村 芳和

9月1日(水) 超高磁場MRIの講演会

時間：17：10～18：10
場所：入院棟 A15階 大会議室
“Clinical 3T MR Imaging for Whole Body”
WILLIAM G. BRADLEY, Jr., MD, PhD, FACR
Department of Radiology, University of California, San Diego

9月2日(木) 東大病院総合防災訓練実施

地域住民の方々も参加し総合防災訓練を行った。
① 地域住民の方を招いてのトリアージ訓練
② 火災発生の想定による消火・避難訓練
③ 起震車・煙ハウスによる地震体験訓練
④ 文京区防災担当官による講演



9月2日(木) 第2回医工連携研究会

時間：15：00～

場所：管理研究棟2F第一会議室
あいさつ

1. 病院長 永井良三
2. 医工連携部長 高本眞一
座長 小山博之
1. In vivo electroporationを用いた血管壁への遺伝子導入_基礎
2. In vivo electroporationを用いた血管壁への遺伝子導入_治療への応用の試み
3. In vivo遺伝子治療のための非ウイルス型遺伝子キャリアの創製
4. PEG-polycationブロック共重合体を用いたsiRNAデリバリーシステム
5. 生体内一酸化窒素蛍光画像化法の開発
他15題。

9月3日(金)

東大病院にここボランティア創立10周年記念式典開催

時間：18：00～19：00
場所：入院棟 A15階大会議室

式典内容

- ①記念講演会
財団法人癌研究会附属病院 武藤徹一郎病院長(元東大病院長) 演題：大腸学始め
- ②記念式典
開会の辞：加我君孝教授(医療サービス推進委員会委員長)
祝辞：文部科学省高等教育局 石野利和医学教育課長
挨拶：東大病院にここボランティア 森田晃弘代表
表彰状及び記念品の授与：百貨店関係者、ボランティア10年活動者22名)



9月7日(火)～9日(木)

東京消防庁本郷消防署立入検査の実施

消防法の規定により火災予防及び火災に関連する人命の安全又は危険物の安全管理を主眼として、本郷消防署予防課長及び検査員8名により東大病院内各棟の査察が行われた。



9月9日(木) 外来化学療法講演会

時間：18：00～19：00
場所：入院棟 A15階大会議室
講演者：伊藤 良則先生(癌研究会附属病院 化学療法科副部長)
演題：「オンコロジーナーズの役割」

9月9日(木) 組換えDNA実験に関する研修会

時間：16時00分～17時00分
場所：入院棟 A15階大会議室
題名：「法制化に伴う組換えDNA実験の相違点と注意点」
講師：岡山 博人先生(医学部組換えDNA実験安全委員会委員長)
内容：1. 法制化の概要 2. 従来の指針との相違点 3. 申請書の書き方

対象：組換えDNA実験施設を有する診療科の実験管理者

9月10日(金)「救急の日」表彰

救急の日(9月9日)にあたり東京消防庁本郷消防署で表彰式が行われ、片田正一救急部副部長と佐藤智加看護部副看護師長は、東京消防庁本郷消防署長から救急業務協力者として、感謝状が授与された。石川千鶴看護師は、文京区救急業務連絡協議会長から救急業務功労者として表彰された。



9月13日(月) 渥美義仁先生講演会

時間：20：00
場所：入院棟12階カンファランス室
題名：「糖尿病性足病変とその予防—チームアプローチの実践に向けて—」
演者：東京都済生会中央病院内科部長 渥美義仁先生(糖尿病・代謝内科)

9月16日(木) 第6回再生医学カンファランス

時間：18：00～19：00
場所：入院棟 A15階大会議室
題名：「臓器再生とバイオマテリアル開発」
担当：腎臓再生医療寄付講座 菱川慶一客員助教

9月22日(水)

東大病院、秋の全国交通安全運動に協力

医学部附属病院では、本富士警察署長から秋の全国交通安全運動への協力要請を受けて、9月22日(水)に文京区本郷4丁目の櫻木神社前で看護部長はじめ看護職員5名が信号待ちする車やバイクのドライバーに秋の味覚「ナシ」と交通安全のチラシを配って「交通事故なしでよろしくお願ひします」と呼びかけ交通事故の防止をPRするキャンペーンを行った。



9月24日(金) 第3回実践漢方セミナー

時間：17：30～19：00
場所：入院 A15階大会議室
内容：「救急外来に於ける漢方：即効性漢方薬」
講師：安斎圭一先生
安斎外科胃腸科医院副院長

9月27日(月)

第17回退院支援事例検討会開催

時間：18：00～19：00
会場：管理棟2階 第3会議室
事例：14F南緩和ケア病棟への転床か、他院緩和ケア病棟への転院かの選択に、本人・家族が困難を要した原発性肺癌、脳転移72歳男性の症例(医療社会福祉部)

9月30日(木) 第5回東大研究倫理セミナー

時間：17：00～19：30
場所：医学部鉄門記念講堂(教育研究棟14階)

- 司会：北村 聖（病院総合研修センター長）
荒川義弘（病院臨床試験部副部長）
- はじめに
大内尉義（医学部倫理委員会委員長、病院
治験審査委員会委員長）
- 基調講演 臨床試験に関する最近の動向
大橋靖雄（研究科 健康科学看護学専
攻生物統計学分野 教授）
- 講演1 医学系研究科・医学部における研究倫
理審査体制と受講の義務化について
大内尉義（医学系研究科・医学部倫理委員会
委員長、病院治験審査委員会委員長）
- 講演2 研究倫理審査を受けるための手続き
大内尉義
- 講演3 病院における臨床研究-IRBと臨床試験
部の活動
荒川義弘（病院臨床試験部副部長）
- 講演4 臨床研究における個人情報管理
大江和彦（病院診療情報管理委員会委員長）
- まとめ
大内尉義

10月1日（金）

東大病院ホームページ・リニューアル

患者さまに対する丁寧かつ十分な情報提供の
できるサイトを目指し、トップページ・デザイ
ンには曲線を多用し、やさしさ、ハート、人と
人の触れ合いを表現するようにした。



<http://www.h.u-tokyo.ac.jp/>

10月4日（月）

特別セミナー「糖尿病フットケアの最新トピックス」

時間：19時
場所：管理研究棟2階 第一会議室
演題：「糖尿病フットケアの最新トピックス」
(1) 米国足専門医 (Doctor of Podiatric
Medicine) はどのように発展したか
(2) 糖尿病フットケアのチームアプローチ
(3) 糖尿病フットケアの最新トピックス
演者：Lawrence B Harkless, D. P. M. (米
国足専門医)

10月5日（火）第17回退院支援事例検討会

時間：18：00～19：00
場所：管理・研究棟2階第3会議室
事例：14F南緩和ケア病床への転床が、他院
緩和ケア病床への転院かの選択に、本
人・家族が困難を要した原発性肺癌、
脳転移72歳男性の症例

10月7日（木）

イラク国ムサンナ県知事、東大病院訪問

外務省の招聘によりイラク国ムサンナ県知事ム
ハモンド・アル・ハッサーニ氏が、日本・イラク
医学協会の仲介により東大病院を訪問された。
同行者：ムサンナ県企画局長アブディルサッ
タル・ハラーン氏、外務省熊谷裕
之外務事務官、日本・イラク医学協
会 都築正和会長及び石田賢司理
事、外務省広報テレビチーム、通訳

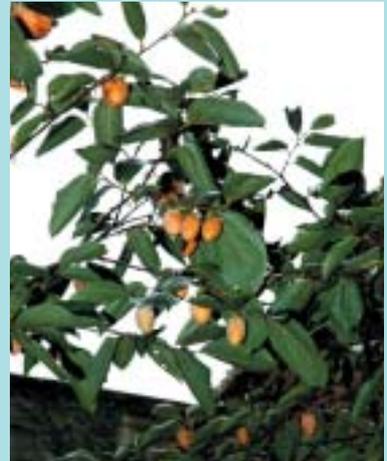
東大病院の四季

秋の収穫：柿の実 (管理・研究棟中庭)

秋の訪れとともに、院内の木々の実が色
づき始めました。

病院管理・研究棟中庭にひっそりと柿の
木が実を付け、清秋の感が漂っています。

柿は日本原産の果物といわれ、「ディオ
スピロス・カキ (Diospyros Kaki)」、
「KAKI」の名で世界中の人に愛されており、
秋の季節に、欠かすことの出来ない『心な
ごむ』果物です。



10月14日（木）

胸部疾患症例検討会・第200回記念会

時間：18：00～19：00
場所：入院 A15階大会議室
内容：特別講演1. 呼吸器外科学 中島 淳助教授
「胸部疾患検討会の回想」
特別講演2. 人体病理学 深山正久教授
「たかが分類、されど分類」

10月25日（月）～29日（金）

東京大学医学部附属病院第7回食事療法展 切っても切れない健康と食事

～健康情報とかしこくつきあおう！～
時間：9：00～17：00
場所：入院 A1階レセプションルーム
展示内容：話題の健康食品、外食、お菓子、塩分、
油脂、アルコール飲料、運動等について
栄養ミニ講習会：外食、脂質、菓子、アルコール、塩
分、健康食品について
体験コーナー：体脂肪測定、血圧測定、血糖測定



10月27日（水）リスクマネジメント研修（講演会）

時間：18：00～19：30
場所：入院 A15階大会議室
講師：長瀬啓介氏（京都大学助教授；医学
部附属病院）
演題：「安全・効率の管理技術」
(医療安全管理対策室)

今後の予定

12月4日（土）腎不全教室

東大病院腎臓内分分泌科では以下の内容で慢
性腎不全教室を開催します。参加はご自由で、

参加費は無料です。第1部と第2部に分かれてお
り、両方出て頂いても、どちらか一方に参加さ
れるだけでも全く構いません。是非、ご家族と
一緒にお気軽にお集まり下さい。下記の連絡先
にお申込み下さい（事前の申込みがなくても、
当日受付しますが、出来れば先に申込み頂けれ
ば幸いです）。

時 間：第1部 10：00～12：00
第2部 12：45～15：30

場 所：入院 A1階レセプションルーム

内 容：第1部：慢性腎不全との付き合い方
慢性腎不全の病態のオーバerview（医師）
慢性腎不全の薬物指導（薬剤師）
慢性腎不全の食事指導（栄養士）

昼食休憩 12：00～12：45
第2部：末期腎不全の治療オプション
末期腎不全治療のオーバerview（医師）
治療選択における看護師の役割（看護師）
血液透析 腹膜透析 腎移植

参加を期待する方：腎不全の患者様とそのご
家族の方ならどなたでも

申込・連絡先：

東京大学医学部附属病院腎臓内分分泌内科医
局 磯部

電 話：03-3815-5411 内線35171

(平日10：00～17：00)

F A X：03-5800-9738

Email：eugo@wc4.so-net.ne.jp

腎臓内分分泌内科ホームページ

<http://plaza.umin.ac.jp/kid-endo/>

発 行 平成16年11月15日

発 行 人 永井良三

発 行 所 東京大学医学部附属病院

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1

TEL 3815-5411

東大病院広報委員会

「東大病院だより」編集委員会

編集委員長 加我君孝

事務担当 東大病院広報企画部

総務課企画法規係

連絡先 TEL 5800-9769

E-mail: HoukiAll@adm.h.u-tokyo.ac.jp

印 刷 所 株式会社 学術社

東大病院だよりは、東大病院のホームページから見るができます。 <http://www.h.u-tokyo.ac.jp/outline/letter.htm>

また東大病院だよりは、年4回発行し、外来診療棟1階ロビー、入院棟A1階ロビーのパンフレットスタンドから自由にお持ちいただけ
るよう情報提供を進めておりますが残部には限りのあることをご了承下さい。